

福岡学生演劇祭講評

総評

8団体それぞれが自分達の表したい舞台を自分達の色で創り上げていたと思います。しかし、どの団体も戯曲が書ききれていない、もしくは推敲が出来ていない様に感じられました。今一度皆んなで戯曲を読み直して頂けたらと思いますし、最後まで納得のいく作品を目指して欲しいと思いました。その為にもジャンル関係なく様々な物事に貪欲に触れて欲しいと思いましたし、どんどんアウトプットもして欲しいと感じました。今回大賞を取りましたトロイの箱馬さんは演りたい事にチャレンジをしていたと思いますし、面白いを追求している様にも見えました。

ひだまりがけ「セルロースのはざま」

あかねちゃんの世界が真っ白なキャンパスに描かれ現れる表現の美しさと、部屋の中でしか広がりを感じられない窮屈さに、今彼女達が感じている世界と繋がれない葛藤を感じました。戯曲が詩的に書かれていた事もありどのような立ち上がりをするのかとても興味深く拝見しました。戯曲から感じられる雰囲気、世界観は崩さずに演出されていた様に思うのですが、細部にこだわりを感じられずどこかで妥協をしたのかなといった印象を受けました。キャンパスである真っ白い部屋や衣装をもっとあかねちゃんの色で染められたら見て側に与える印象はもっと変えられたと思うし、演出の表現したい世界にもっと近づけたのではないかと思います。また、あかねとすずこの会話をもっと丁寧に重ねるだけであかねの心情が伝わったと思います。テクニカル面においてももう少しわがままにもう少しこだわって、ひねって、混ぜて、また飾って、そして削ぎ落とす作業をしてもらえるともっとワクワクできた気がします。

産業医科大学「ウサギは朝を待つ」

1人ではないのに誰とも交われない、このまま誰とも触れ合えず生きていき誰にも気づかれずに死んでしまうかもしれない、それは簡単には想像出来ない怖さと寂しさがあるのだらうと思います。だからこそその事と対面し葛藤しながく人間の姿をもっとフォーカス出来るとこの作品はもっと魅力的になったのではないかと感じました。その為には作品の後半で提示される備蓄が足りないというシーンをもう少し早めに持ってきたほうがいいのかもしれないし、1人遊びの姿の虚しさを丁寧に表した方がいいのかもしれない。一人芝居でしたので私だったらをより考えてしまったのですが、私だったらこの宇宙船のディティールをもっと細部まで細かく表現しようとするし、窓から見える宇宙をしっかりと目に映すだろうなと考えました。その役がどう動き何を見てどう考えそれによってまたどう動くのか、その日常の連鎖をより大切にしたい作品だなと思いました。

期会□学「Be Angel, Be Born」

作り手側のこの世界での生きづらさや世間に対する否定的な何かを強く感じた作品。何よりこの作品を書き演出した方の事が心配になってしまいました。(余計なお世話だなとは思いつつ) 宗教感溢れる美しい音楽とそれに準ずる世界観、しかし、そこから繰り出されるセリフや感情の一つ一つはあまり繋がりを感じられずただただ苦しいと訴え続けているようで、でもどうせこの苦

しさはわかって貰えないのだろうと客を遮断しているようでもあって、ではなぜこの作品を創り世に出したのだろうかと疑問に思い続けた30分でした。

あともう少しでいいのでこの作品を他者に見せる意味、見せて自分がどうなりたいのかを考えて見てほしい、そうすればもっと違う形の表現が生まれ何某かの形で見て側と繋がれると思うのです。

そんな中、掃除人役の方のその場に凜と立ち、自身の役割を全うしようとする姿に目が行きそこが少しこの作品においての救いのようにも感じられました。

福岡教育大学「カフェ・ド・ミラクル」

カフェの看板に光が当たり続ける演出に、その場の安心感と暖かさを感じました。

ただ、主人公である新入生がこのカフェで出会えた奇跡とその事によってどうシーンが動きどう周りに連鎖が起こったのかが見て側に分かりづらく、この作品の根幹の部分が表現しきれていないのが残念でした。

台本に書ききれていない部分が沢山あったように感じましたし、その部分を皆んなでなぜ？どうしよう？と話し合えていないのではないかなと思います。

また、新入生が最後まで新入生のまま終わってしまう事に疑問を感じました。ミラクルを願ってこのカフェに来て、彼女にとっての何某かのミラクルが起こって未来が動くのならばもう彼女は個として存在してもいいんじゃないだろうか。

そして、この作品は会話が主なのだから決められたセリフを決められたように発するのではなくもっとお互いのセリフを受けそして返す、お芝居の基本をしっかりやってほしいなと思いました。

トロイの箱馬「どうしようもなく特別な私」

スピード感のある台詞回しとテンポの良さ、言葉の重なり方も気持ちよく、見て側が高揚感を感じられる、とても楽しい作品でした。キャスト3人のそれぞれ魅力的でバランスも良く、役が変わる瞬間も分かりやすかったです。

沢山稽古をしたんだろうなーと感心しました。

だからこそではありますが、惜しい！！と思う部分もあります。

時間が無い中で会場当たりだったのだろうと感じさせるテクニカルとのずれ、せっかくの軽快なセリフなのに客席まで届かない声量や、聞き取りにくい滑舌、勢いはあるが平坦にも聞こえてしまいそうな台詞回し、キャスト3人の身体表現の差。

と、書いては見ましたがそれでも客席を惹きつける力を持つ作品だと思います。

これからさらにクオリティが上がるだろうと期待しています。

惑星未虎Ⅱ「ジコンクエスト」

RPGの世界観で進んでいく作品。OPが勢いよく始まり客の期待感を上げてくれたのですが、その後が大人しくなり過ぎた様に感じました。

きっと演出はやりたい事が沢山あったんだろうけれどそのどれもを上手く表現出来ていない様に思いました。作り手の考えでは成立している様に思っても見て側にはその意図まで伝わっていない事は起こりがちではあります。さらにそれが悪い様に受け取られる事もあります。だからこそ第3の目は必要だと思いますし、自らもその表現が適切かどうかを常に考えなくてはいいかなのではないかなと思います。

また、やりたい事に対しての表現の手数が少ないなとも思いました。これは単に世に溢れる多彩な表現方法にあまり触れていないんじゃないかなと思いますので是非ジャンル問わず様々な物に触れて頂きたいです。

そして、作品内において一番伝えたい事は何か、そこをどうピックアップするかを大切にしたいなと思いました。

劇団テスカトル「素晴らしい世界」

コントのような掛け合いが続く作品。

キャストはそれぞれ個性があって良いのですが、それを活かすきれてはいないなと感じました。芝居は常に正面を向き、セリフはそれぞれ別の方向に飛び、隣にいるのに距離感はバラバラに感じられ、作品全体のテーマがぼやけている様に思いました。

今回、こちらの団体さんとはお話が出来ず作品や演出意図を聞けなかったのがただただこの作品を読み解けなかっただけかもしれませんが、もっと丁寧にシーンを積み上げていけていたらなと思いました。

gekid(大橋キャンパス演劇部)「冷たいくらいがちょうどいい」

学園祭の準備中の一コマ。まさに青春を感じられる気持ちの良い作品。

参加者みんなが一丸となって作品製作を行なっているのが感じられとても嬉しくなりました。

しかし、キャストの表現の仕方がバラバラで、並べてみた時にバランスが悪く見えてしまったのが惜しいなと思いました。あまり経験のない演者さんだったと聞きましたがその調節を演出が出来たらもう少しお話の方に意識がいったのではと感じます。また、冷凍マグロちゃんという存在が面白かったのもっと活躍させても良かったのでは？とも思いました。

演出さんに何か得体のしれない面白味を感じましたので、ご本人にはお伝えしましたが遠慮せず形にとらわれず自分の演りたいを探して行って欲しいと思います。

そして、優奈役の方の芝居はセリフに余計な飾りがなくその場にしっかり存在していたなと思いましたのでこれからも楽しみです。